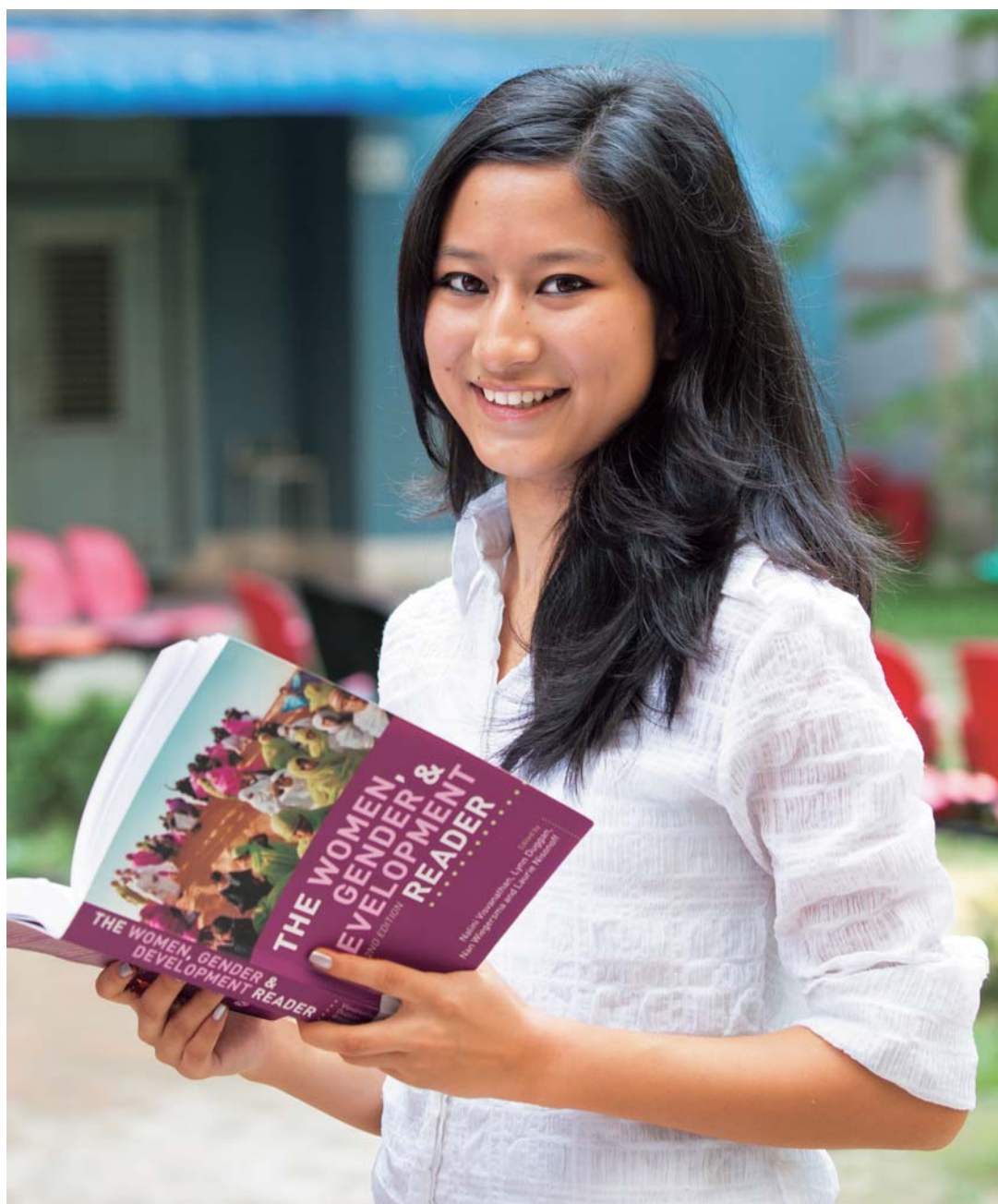


服のチカラ

—— 世界を良い方向に変えていく ——

特集 未来をひらくために



世界を良い方向に変えていく

服のチカラ

12

CONTENTS

- 03 アジア女子大学が世界を変える日
- 09 ユニクロ 復興応援プロジェクト つづける。服のチカラで。
- 12 世界中の子どもたちに夢と希望を届けるプロジェクト「クローズ・フォア・スマイル」

EMPOWERING
THE NEXT GENERATION

未来を ひらくために

未来を予測することは、誰にもできません。それでも、実りある未来を切りひらくために、できることはあるはず。今すぐ取りかかるべき課題もあれば、5年、10年先を見すえ、土を耕し、種をまき、水をまき、収穫は次の世代へ—そのような方法で取り組む課題もあるでしょう。未来を担う若者を支援する、ユニクロの3つのプロジェクトをご紹介します。



EMPOWERING
THE NEXT GENERATION

01

アジア女子大学が 世界を変える日

貧困層が国民の大半を占めるといわれるバングラデシュに、注目の大学が誕生している。アジア女子大学(Asian University for Women)。アジアから中東まで16カ国の女子学生が、寮生活を送りながら宗教や文化の壁を越え、学んでいることとは何だろうか？



EMPOWERING
THE NEXT GENERATION

01

求められる姿勢は「ひらかれていること」

アジア女子大学での最初の一年間は、寮での共同生活からスタートします。女性に大学教育を受けさせることを当然と考えない環境で育った彼女たちは、将来のどんな夢を思い描いて学んでいるのでしょうか。



アクリティ マナンダーさん

ネパール連邦民主共和国出身、アジア女子大学 一般教養課程1年

「女の子に勉強させて、何の役に立つ？」といわれても、私は勉強して役に立ちたい

都市に生まれるか田舎に生まれるかで、ネパールの子どもの運命はガラッと変わってしまいます。

田舎では交通の手段がありません。歩いて何時間もかかって学校に通っても、衛生管理の行き届かない給食でお腹をこわし、病気になってしまうことがあります。そんなところに子どもをやるか、と考える親だって出てきます。

ネパールに生まれた女の子に教育は必要か、という話もあります。将来は結婚相手の家に入り、早く子どもを産み、子育てをし、家事をする。それが当たり前。川に水をくみに行き、かついで運ぶのは主婦の仕事。そんな環境に生きる女の子に勉強させて、何の役に立つ?というわけです。今でも地方の女性の識字率は、男性に比べてかなり低い。

幸い、私は首都のカトマンズに生まれました。小さい頃から勉強するのが好きでした。勉強する、しな

いは自分が決めると思っていました。その気になれば、どこでも、どうやっても、勉強はできる。成績のおかげで、学費は全額、奨学金でまかなくなりました。だから親に気兼ねする必要はありませんでした。

母がどう思っているのかわかりません。たぶん、できれば働いてほしいという気持ちと、勉強したいなら一生懸命やれば良いという気持ちと、両方あるんじゃないかな。母は専業主婦ではなく、ずっと縫製の仕事を続けながら家計を支えています。

カトマンズの女子学生が大学に行くとしたら、理工系や経営学など、実践的なもの、すぐに役立つものを選ぶ人が多いですね。私は自然科学や社会科学、哲学などを幅広く学ぶリベラル・アーツに関心があったのですが、まったくの少数派でした。そもそもネパールでは、すぐに役立つ学問以外は、敬遠される傾向にあると思います。

リベラル・アーツを学びたいのなら、バングラデシュにあるアジア女子大学(AUW)がいいんじゃない?と教えてくれたのは、ジャーナリストで、世の中の動きに詳しい、私の叔母でした。

AUWの名前を初めて聞いてまもなく、通っていた高校にAUWのコーディネーターがやってきて、説明会が開かれました。インターネットで調べてみると、叔母のいうとおり、学びたいと思っていたことがちゃんと用意されていそうでしたし、部活動も魅力的でした。これは何とかしてAUWに入りたい、と思うようになりました。

大学に入学すると、ほとんどの学生が寮に入っていて、宗教も言語も文化も違う仲間と共同生活を送ります。私も4名の同級生と部屋をシェアしています。多文化主義の大学で、どのような姿勢が求められるかといえば、それは「ひらかれていること」ですね。学問に対しても、人に対しても、それは同じ。共同生活を送りながら、「他人から学ぶ」とはどういうことなのかを日々経験することになります。

AUWに入ってから、リベラル・アーツだけでなく、

政治学や経済学に関心をもつようになりました。自分が何を学び、そこから先、どの方向に向かっていくのがいいのか、あまりにたくさんの選択肢がありすぎて、ちょっと迷子になりそうかな(笑)。

ただ、どのような学問を学ぶにしても、最終的にはネパールに帰って、女性の地位向上に貢献できる仕事をしたい。政治家にしてもジャーナリストにしても、女性がキャリアを積む例が極端に少ないので、この状況を少しでも自分の手で変えたいんです。

手のひらの模様ですか?ああ、これはメンディ。ヒンドゥー文化圏の女性は、晴れがましい結婚式のような儀式に出るとき、手や脚に染めの模様を描いて祝うのです。明日、同室のバングラデシュの学生が親族の結婚式に出席するので、みんなの手にもついでにと(笑)、メンディを描いてくれたんですよ。

それぞれの文化のバックグラウンドを共有できれば物事を見る目が多面的になる。自分の立つ場所への批評的な視点も養うことができる。ネパールに帰って仕事を始めることになったとしても、他の国々の文化や、人々との交流は、続けていくでしょう。



EMPOWERING THE NEXT GENERATION

01

教える側にとっても アジア女子大学は特別な場所

16カ国から集まる学生たち。寮生活が原則。英語で行われる授業。バラバラの学生たちをたばねるには、教員たちの熱意も深くかかわってきます。それぞれの立場から見えてくる、アジア女子大学の目指すもの、をうかがいました。

ファヒマ アジズさん アジア女子大学 副総長

共学ではなく、女子大学であることの意義

豊かで生産的な人生を送るための鍵は、何といっても教育だ、と私は思います。

アジア諸国では、多くの女性たちが、きわめて若いうちに結婚するよう求められ、そのために教育の機会を得られずにいます。自分のアイデンティティや可能性、才能を発掘したり、社会のなかでの十分な市民権を得ることができないままです。

女性がこれまで期待されていなかった能力を存分に発揮し始めるためには、「安全だと感じられる環境」「思っていることを何でもいえる環境」「信頼や敬意をもって扱われる環境」が必要です。そのためにも、共学ではなく女性のための大学があることの意義は大きい。アメリカの女子大学で学んだ私自身、そう感じています。

アジア女子大学(AUW)の学生たちに望むのは、思いやりのある市民になり、倫理的なリーダーになることです。16カ国から来た学生たちがそれぞれの国に戻り、地域社会を変えていく力になってほしい。そして、女性が教育を受けられる手助けをしてほしい。

学生と話していると、彼女たちが自分自身の卒業後の人生について考えているだけでなく、すでにボランティア活動に取り組んでいたりと、子どもたちの勉

強をみてやったりもしているんですね。夏休みに帰省した学生が、多民族国家である故郷で、問題解決のための意見交換の場をつくり、合意を取りまとめる役割を担っているケースもあります。

そういう学生たちをととても誇らしく思っています。



レベッカ ハートマンさん アジア女子大学 学部長

寮生活を送りながら自然に理解し合う

全学生501名のうち、471名はキャンパス内で寮生活をしています。国籍の違う同士が同室になるように部屋割りをしているため、大学の共通語である英語で会話する必要に迫られ、おのずと英語の実力もつく。文化や宗教、生活様式の異なる同士が理解し合い、仲良くやっていく——AUWで求められるこの姿勢についても、寮生活を送るなかで自然に身につけていくことになります。

学生が自主的に企画する季節折々の文化祭も、お互いをよく知る場になっています。勉強に追われながら時間をやりくりし、民族衣装を着て踊りを練習したり、舞台上で発表したりするうちに、それぞれの文化を尊重する態度が育っていくのです。

女性ばかりなので、手を差し伸べることも自然にできるようになり、多様性を認めて一緒に学ぶ姿勢も育みやすい。女子大学ならではの利点がありますね。



マーガレット クルシェフスカさん

アジア女子大学 文章技法担当ディレクター兼アジア研究助教授

プレッシャーと猛勉強の先に待っているもの

学生たちの多くは、AUWに来なければ、大学教育を受ける機会はありませんでした。彼女たちはそのことを十分に自覚しています。私も貧しい家庭の出身なので、高等教育の機会を与えられることの重要性が痛いほどわかります。

アメリカの大学では英語の文章技法を学ぶのは選抜された学生です。ここでは100%の学生が出席します。英語力を高める必要があると自覚しているのはもちろん、彼女たちは並はずれて意欲的で、与えられた機会をつかんだら離さないんです。熱意に溢れた学生を教えるのは、非常にわくわくすることです。

プレッシャーも大きい。だから彼女たちは猛勉強します。それは、強制的なものでも、道徳的なものでも、宗教的な動機にもとづくものでもない。私にはそれがとても意義深いものであり、そこにこそ、私たちの目指す未来があると感じています。



01

ユニクロはアジア女子大学を支援しています

貧困層が人口の大半を占めるといわれるバングラデシュに、未来のリーダーを育てようというアジア女子大学が生まれて約6年。ユニクロは奨学金の提供を通じて、アジア女子大学の支援をしています。



ユニクロが支援している奨学生たち

アジア女子大学(AUW)は2008年、バングラデシュの第2の都市、チッタゴンに創立されました。チッタゴンは古い歴史ある港湾都市という性格から、多民族、多宗教の多様性を保ちつつ、貿易、産業、教育の中心地としても栄えてきました。

チッタゴンを築きあげた歴史的な多様性は、そのままアジア全体が現在抱えている問題の縮図ともいえます。宗教、文化、言語、貧困の壁を乗り越え、より良い世界をつくるにはどうすればいいのか。アジアの抱えている問題は、そのまま私たち自身の問題だといえます。

まず、何より必要な取組みは、教育です。より良い世界をつくるために必要なことを学び、学んだことを土台に、生まれ育った故郷で、あるいは世界のどこかで、問題を発見し、解決していく。さまざまな価値観

を認め合いながら、支え合う共通の地盤は、教育によって育まれていくはず

AUWは5年間の教育プログラムによって、学生を送り出しています。女性の大学進学が当たり前ではない環境からの進学者が多く、全学生の94%が寮生活を送り、約60%が全額奨学金受給者です。

ユニクロは面接によって選ばれた20名の学生の全額奨学金、5年間で100万USドル(約1億円)の寄付を実施しています。この寄付を通じて、個人の経済事情にとらわれず、意欲のある女性の誰もが大学で学べる機会を提供し、未来のリーダーの育成をサポートします。

ユニクロはこれからも、世界を舞台に活躍する女性の育成、女性の社会進出を支援していきます。次の時代を担う世代がのびのびと活躍できたときにこそ、未来はひろがっていく、と信じて。

02

ユニクロ 復興応援プロジェクト つづける。服のチカラで。

ユニクロは、東日本大震災発生直後より活動を開始し、若者たちへの支援にも注力しています。未来を担う彼らが希望をもって前に進んでいくことは、地域全体の復興につながると考えています。今後も、ユニクロ店舗を活用した職業体験をはじめ、被災地の若者を応援するさまざまな活動を継続的に実施していきます。

ユニクロいわき小名浜店で
職業体験をしている福島県立
双葉高等学校の高田駿佑さん

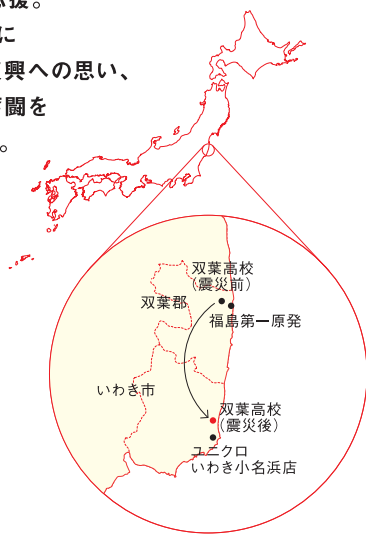


EMPOWERING
THE NEXT GENERATION

02

福島県の高校生が挑戦 地域のための店舗づくり

福島県立双葉高等学校の1年生を、
職業体験で応援。
プロジェクトに
込められた復興への思い、
生徒たちの奮闘を
取材しました。



教室からユニクロいわき小名浜店に「出勤」する生徒たち。緊張した面持ちの彼らは、福島県立双葉高等学校の1年生です。本来の校舎は、福島第一原子力発電所から3.5キロメートルの位置にあり、原発事故発生後、双葉郡からいわき市に学校ごと避難してきました。震災前400名以上いた生徒は65名に。1年生は全14名です。27種類あった部活動も8種類になりました。それでも多くの生徒たちには、こうした状況を憂慮している様子が見られません。NGO、アドラ・ジャパン事業部長 橋本^{しょうご}笙子さんは「大人よりも子どもたちの方が先に、現実を受けとめ、未来に向かって歩き始めている」といいます。

「彼らのために、私たちが今できるのは『つなぐ』こと。地域社会や必要な情報とつなぐ。多彩なりソースをもつ企業とつなぐ。つながった先で、さまざまな経験をとおして、困難に屈せず生きていく力を身につけてほしいと思っています」

ユニクロは、高校生にも身近な服を扱っており、地域社会との接点である店舗も有しています。アドラ・ジャパンとユニクロが企画したのは、その特性を活かして、高校生たちに多様な経験を

提供するプロジェクトです。物質的な援助、外部からの支援にはどうしても限界があります。だからこそ、未来を担う高校生たちには、不安に押しつぶされることなく前を向いて歩み続ける力を、自らの経験を通じて育ててほしい。このプロジェクトには、そんな復興への願いが込められています。

双葉高校1年生のミッションは、ユニクロいわき小名浜店を地域で一番愛される店舗にすること。地域のニーズ調査から始めて、地元の主要産業である農業・漁業関係者向けファッションの提案など、ユニークな企画が続々と誕生しました。それらの企画を実現するために、ユニクロ東京本部でプレゼンテーションにも挑戦。そして、5カ月間におよぶプロジェクトの集大成が、店舗スタッフの一員として働く、3日間の職業体験です。

職業体験初日。緊張のあまり直立不動の生徒たち。朝礼で練習したばかりの「いらっしやいませ」さえ、いざ店頭立つと、うまくいかない。それでも、精一杯の笑顔で接客をし、お客様からの「ありがとう」の言葉に励まされ、またユニクロのスタッフがきびきびと働く姿にも刺激を受けて、

少しずつ自主的に動けるようになっていきました。

店舗から教室に帰り制服姿に戻った生徒たちは一様に、プロジェクトをやり遂げほっとした表情。感想をたずねると、「働くのがこんなにたいへんだとは思わなかった」「難しいこともあったけれど、他の職業にも挑戦してみたい」などの声が聞かれました。それらはすべて、不安を伴う局面でも、勇気をもって一步を踏み出したからこそその声。結果が思うようなものでもなくとも、小さな一步に過ぎなくても、今日の一步が、明日をひらく原動力になる。その積み重ねが、困難に屈せず未来をひらく力につながっていきます。

担任の萩原ゆかり先生は、こう振り返ります。「教室では見せたことのない明るい笑顔をのぞかせる生徒や、苦手なことにも挑戦している姿に、一人ひとりの可能性を改めて感じました。これまでの支援に応える意味でも、自分の道をたくましく進んでほしいです」

仲間とともに奮闘した5カ月間。彼らが、体験したことのすべてを力に変えて、未来に向かって歩み続けてくれることを願っています。

INTERVIEW



高田 駿佑さん

服が好きで、店舗での職業体験で着る服は、友だちの分もコーディネートしました。お客様をすぐに案内できるよう、商品の位置をすべて把握するのがたにたいへんでした。



志賀 沙也香さん

兄も双葉高校の生徒だったので、校舎はいわき市に移転したけれど、私もこの高校で学ぶことを決めました。人見知りなので、店舗での職業体験はとても緊張しました。



山口 遥希さん

祖父母が漁業の仕事をしていたこともあり、漁業関係者向けのコーディネート提案しました。自分たちでディスプレイをした服にお客様が興味をもってくれたのがうれしかったです。



菅野 竜馬さん

両親は仕事の関係で離れた場所に住んでいるため、学校には寮から通っています。具体的な進路はまだ決めていないですが、接客業もおもしろそうだなと思いました。

「お買物体験プロジェクト」
で、服を真剣に選ぶセルビア
の女の子

EMPOWERING
THE NEXT GENERATION

03

世界中の子どもたちに 夢と希望を届けるプロジェクト 「クローズ・フォア・スマイル」

「クローズ・フォア・スマイル」は、ユニクロと、世界トップクラスのプロテニスプレイヤー、ノバク ジョコビッチ氏が、未来を担う子どもたちのために共同で立ち上げたプロジェクトです。世界中から、子どもたちの夢を支援するアイデアを募集。46カ国から寄せられたアイデア総数は739件にのぼり、厳正な審査の結果、8件の実行が決定し、順次始動しています。今号では、ガーナで実施している「女子サッカープロジェクト」と、ジョコビッチ氏の母国、セルビアで開催した「お買物体験プロジェクト」を紹介します。

EMPOWERING
THE NEXT GENERATION

03

女の子に生きていく力を 「女子サッカープロジェクト」 —ガーナ—

サッカーでガーナ、ジンバブエ、バングラデシュの少女たちを支援。
彼女たちの成長は、家族や地域にも、良い変化をもたらしています。



「女の子だから」。それだけの理由で、教育や保健医療を十分に受けられないなど、不当な立場に置かれている少女たちがいます。「女子サッカープロジェクト」は、恵まれない環境にある少女たちが、サッカーを通じて仲間と触れ合い、目標に向かって努力をし、そのなかで地域社会に参加する力を育む取り組みです。ユニクロと、途上国の子どもたちを支援するNGO、プラン・ジャパンが協力をして展開。ユニクロは、資金支援のほか、大会ユニフォームを寄贈しています。

2013年12月、西アフリカのガーナで南地区大会の決勝戦が開催されました。ガーナにおける、少女の小学校中途退学率は60%以上。経済的な理由で学校に通えない子、初等教育も受けられないまま、早すぎる結婚・出産を強いられる子もいます。そうした慣習のなかで生きる少女たちにとって、大会は大舞台。また村民たちにとっても、

サッカーはたいへん人気があり、大勢が応援に集まります。大きな期待を受けてピッチに立ち、自らが主役となる経験を通じて、少女たちは自信をつけ、社会に参加することを学んでいきます。このプロジェクトに参加しているギフティさん(写真下、中央)は、家族にも変化があったといいます。

「うれしかったのは、サッカーを通じて活き活きと変わっていく私を見て、母や兄弟の意識も変わったこと。勉強してジャーナリストになりたいという私の夢を、応援してくれるようになりました。以前は内気でしたが、現在は、試合のハーフタイムを使って、村の人々に学校中退や望まない妊娠などの社会課題について、啓発する活動もしています」

ギフティさんは、引っ込み思案で自分の意見が主張できなかった、かつての彼女ではありません。次世代の少女たちや、地域の未来をも変えていく、強い意志と行動力を備えています。



難民・国内避難民の 子どもたちに服のチカラを 「お買物体験プロジェクト」 —セルビア—

好奇心いっぱいの表情で、ユニクロ特設店舗に来たセルビアの子どもたち。
その瞳は、これから始まる「とびきりすてきなこと」に、きらきらと輝いています。

新しい服を買いに行く、好きなものを選ぶ、試着する、そして購入する。セルビアに住む難民・国内避難民の子どもたちにとっては、そのどれもが特別な体験です。

東ヨーロッパのセルビアを含む旧ユーゴスラビア諸国で民族紛争が勃発したのは、1990年代のこと。内戦が繰り返されるなかで、多くの人々が住み慣れた土地を追われ、難民・国内避難民となることを余儀なくされました。民族間の対立は未だ解決しておらず、2013年現在、セルビア国内では約30万人の難民・国内避難民が閉塞的な生活を強いられています。避難先で生まれた難民二世世代や、国内避難民の子どもたちは、自由な暮らしを知らず、大人以上に、将来に希望を見出しにくい状況です。

そんな子どもたちのために、ユニクロと、難民の心理的、社会的支援に取り組むNPOのACC・希望が協力して企画したのが「お買物体験プロジェクト」です。自分の好きな服を選び、購入し、なりたい自分になる。その経験を、未来に希望をもつこと、力強く生きていくための自信につなげることが目的です。

プロジェクト開催日、セルビアの首都・ベオグラード市内にユニクロ特設店舗がオープン。これまで体験したことのない「すてきなこと」への期待を胸に、子どもたちが続々と来店してきました。店内には、25種類、3,200着のカラフルな服がずらり。初めて見るたくさんの服や美しいディスプレイ、そして「ドバル・ダン！（こんにちは！）」と元気よく出迎えてくれるユニクロのスタッフたちに、子どもたちは興奮を抑えきれない様子。店内に入った瞬間、歓声を上げる子、思わず駆け出す子までいます。

子どもたちは、好みの服を選び、プロの「接客」を受け、試着もして、入店時に手渡されるバウチャー（買物券）で、インナー、ジャケット、パンツ、シャツの4点を「購入」します。

新品の服を一度に4点も手に入れるなんて、初めての体験。最初は戸惑う子もいましたが、試着をし、スタッフが鏡にその姿を映してあげると、パッと表情が明るくなり、にっこり。子どもたちのうれしそうな様子に、店内の誰もが、自然と笑顔になっていました。

服を選び終わったらレジに行き、バウチャーで「購入」。服で大きく膨らんだ、白い買い物袋を抱える様子は、とても大事そう。実際には無償なのですが、「購入した」という満足感も、彼らにとっては貴重な体験なのです。

2日間で400名以上の子どもたちが招待されたこのプロジェクトには、彼らをおもてなしするために、日本・フランス・英国・米国のユニクロからスタッフが集結。その他にも、ベオグラード大学日本学科の学生や、開発途上国への国際協力を行うJICAなど、多くの人々が参加しており、全員の気持ちが一つにつながったことで、すばらしい1日をプレゼントすることができました。

イベントは、子どもたちのパフォーマンスで締めくくられました。買ったばかりの服をまとい、楽しさ、自信、感謝の気持ちなど、さまざまな感情を全身で表現する子どもたち。その様子に改めて気づかされたのは、服には、困難に立ち向かう子どもに寄り添い、夢への後押しをするチカラがある、ということ。私たちはこれからも、服のチカラで子どもたちの希望をサポートしていきます。





世界で今起きていることは、 私たち自身の出来事でもある、と考えます

服をつくり、服を販売する、という日々の活動を通じて、ユニクロは「服を変え、常識を変え、世界を変えていく」ことを目指しています。世界を変えるには、子どもが、若者が、心に描いた夢を実現できる社会が必要です。それが大きな夢でも、ささやかな夢でも、個人が自由に感じ、考えることからすべては始まります。夢の実現には、個人が活躍してもらうための自由と場所を、社会が整える必要があるでしょう。夢が実現すれば、個人はそれを社会に還元する。そのような個人と社会の循環が、社会を豊かにし、個人を豊かにしていくはずです。

現実の世界はどうでしょう。社会的、経済的に弱い立場に立たされ、夢を抱くことすら困難な環境で生まれ育つ子ども、若者があまりにも多いことはあきらかです。子どもや若者が、夢をもつことのできない社会に未来はあるでしょうか。そのような現実を、遠く縁のないものだと思っていられる時代は終わりました。グローバル化が進んだ現在、自分に無関係な出来事は、もはやどこにも存在しません。

「アジア女子大学」で学ぶ学生たちへの支援、継続的な東日本大震災復興支援「ユニクロ 復興応援プロジェクト」、世界中の子どもたちに8つのユニークな活動で夢や希望を届ける「クローズ・フォア・スマイル」はいずれも、次の世代を支援することが世界をより良い方向に変えていく力になると信じ、ユニクロが取り組んでいるプロジェクトのなかの一つです。

「服のチカラ」に関する皆さまの声をぜひお寄せください。
本冊子添付のハガキもしくは、下記ホームページまでお願いいたします。

<http://www.fastretailing.com/jp/csr/>
<http://www.uniqlo.com/jp/csr/>